

親鸞の課題

——『教行信証』別序を通して——

廣 瀬 惺

疑問は天に向て起される。しかし、その解答は地から与えられる。

〔『曾我量深選集』三・二三四〕

はじめに

親鸞は、『教行信証』後序^{〔1〕}に、

真宗興隆の大祖源空法師

〔定本親鸞聖人全集〕一・三八〇頁〕

と記している。真宗を興隆したのは法然であるということである。それに即して述べるなら、親鸞はその興隆された真宗を、聞くという立場に立って徹底して明らかにしていったと言えるであろう。さらに付け加えるなら、家族を持ち、時代社会に身を置くことを通して、そのようにして日々生きる衆生にとっての仏教として、法然によって興隆された真宗を明瞭にしていたのである。

では、親鸞によって明らかにされた眼目は何か。一言で述べるなら、真宗を本願の仏教として明瞭にしたことにあると言える。そのことは、法然に対する恩徳の至情をもって『教行信証』撰述の意を記している後序に、

然るに愚禿積の鸞、建仁辛の酉の曆、雜行を棄てて本願に帰す。

〔定本親鸞聖人全集〕一・三八一頁

と記しているところに、端的に窺うことができる。

この記述は、後序において、法難と法然の入滅を受けて法然との出遇いの意義を確認すべく記している文であるが、法然が『選択集』の跋に、自らの浄土仏教との出遇いを、

余行を捨てて念仏に帰しぬ。

〔真宗聖教全書〕一・九九三頁

と記していることを前提としていることを疑うことはできない。ここで、法然が「念仏に帰しぬ」と記しているところを、「本願に帰す」と記しているのであるが、そう記しているところには、法然との出遇い以後の親鸞の悪戦苦闘の求道の歩みがあると言わなければならないであろう。その歩みをくぐって、親鸞はどのように記しているのである。そうであるとすれば、この親鸞の記述には、法然との出遇いによって帰した念仏の教えを、その後の歩みを通して、本願の仏教として明確に領きえたことを法然に表白する意をも込めて、このように記していると言えるのではないであろうか。

初めに序を置いている『教行信証』信巻は、まさに親鸞の己証の巻であると言える巻であるが、それは、法然との出遇い以降の親鸞の歩みを背景として記されている巻である。そして、その序、即ち別序には、一度の出遇いを得た親鸞が抱えた課題と、その課題をどのようにして克服していったのかを窺うことができるのである。

別序の展開と課題の基盤

『教行信証』の三序には、『教行信証』撰述の意趣がそれぞれ特徴的に述べられている。総序では、真宗に遇いえた身の喜びにおいて著す意が表されている。また、後序では、法難と法然の入滅を受けるかたちで、法然に遇いた身の深い喜びにおいて、その恩徳の至情から、法然によって興隆された真宗を明らかにせずにはおられない使命において著す意が表されている。それら二つの序に比するならば、別序は決然とした確信と覚悟をもって、直接的に信巻を、さらには『教行信証』を著す意が表されていると言えるであろう。それは、一度の出遇いに始まるその後の歩みを通して、浄土仏教の源底を尋ねたところからの確信に基づくものであると了解されるのである。

別序の展開を追っておきたい。先ず冒頭で、

夫れ以みれば、信樂を獲得することは、如来選択の願心自ら発起す、真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧
従より顕彰せり。
〔定本親鸞聖人全集〕一・九五頁

と、信樂（念仏の信心）が、教え（大聖の善巧）を縁として「選択の願心」そのものが発起したものであることが記される。そして、それを受けて、

然るに末代の道俗・近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を眨す、定散の自心に迷いて金剛の真信に昏し。

（同上）

と、そのことを受けとめえない在り方をとっている、末代の道俗と近世の宗師の問題が指摘されている。そして、

さらにそれを受けて、

爰に愚禿釈の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披闕す。

(同上)

と、「諸仏如来の真説」と、「論家・釈家の宗義」によって、冒頭に述べた事実を明らかにすることが記されているのである。そして、さらに、

広く三経の光沢を蒙りて、特に一心の華文を開く。且く疑問を至して遂に明証を出だす。

(同上)

と、親鸞自身、問答というかたちをもって、信衆が選択の願心の発起したものであることを尋ね明らかにしていくことを記しているのである。⁽³⁾

このような別序の展開を一読すると、ともすれば、親鸞が自らを第三者の立場において、対他的に、末代の道俗・近世の宗師の間違いを「諸仏如来の真説」と「論家・釈家の宗義」によって指摘し批判して、本義を明らかにする意が述べられているようにも了解される。しかし、そうではない。そのように述べられているところには、法然に出遇って以降の親鸞自身の求道の歩み、課題が裏付けになっているのである。そのことは、「諸仏如来の真説」に信順して、論家・釈家の宗義を披闕す」と、記されているところに窺うことができる。自身の課題であったからこそ、「諸仏如来の真説に信順し」、特に「論家・釈家の宗義を披闕」しているのである。「披闕」の「闕」は、詳しく調べ明らかにすることである。それは、親鸞自身に決着づけずにはおられない課題を抱えていればこそであると言わなければならないであろう。

ここにおいて、「諸仏如来の真説」とは、信巻始めに引かれている正依の『大経』及び傍依の『如来会』の文、

特に本願文と本願成就文である。そして、「論家・釈家の宗義」とは、それに続いて引かれている曇鸞の『論註』の文と『略論安樂浄土義』の文、そして、善導の『観経疏』三心釈を中心とする文であり、さらには源信の『往生要集』の文である。⁴⁾

親鸞は、一度の出遇いが課題となることを通して、「諸仏如来の真説」を繰り返し拝読し、そこに願意を聞き取っていったのである。また「論家・釈家の宗義」の文を克明に読み込んでいったのである。

親鸞は、一度の出遇いを問わしめた現実について、それを示すべく『教行信証』坂東本の信巻には、序に先立つて次の『涅槃経』の文を置いている。

復有一臣名悉知義 昔者有王名曰羅摩害其父得紹王位

跋提大王毘楼真王 那曠沙王 迦帝迦王

毘沙佉王 月光明王 日光明王 愛王

持多人王 如是等王皆害其父得紹王位然無

一王入地獄者於今現在毘瑠璃王 優陀邪王

惡性王 鼠王 蓮華王 如是等王皆

害其父悉無一王生愁惱者 文

そしてさらに、親鸞は善導の三心釈を引くに先立って、

此の五濁五苦等は、六道に通じて受けて、未だ無き者は有らず、常に之に逼悩す。若し此の苦を受けざる者は、

(『定本親鸞聖人全集』一・九四頁)

即ち凡数の撰に非ざる也と

〔定本親鸞聖人全集〕一・一〇一頁

との「序分義」の文を置いてあるが、その文も、親鸞をして一度の出遇いを問わしめたものが何であったのかを示す文であると了解される。

それらの文に記されている現実には、流罪以後の親鸞が出会った現実であり、なまじの信などを一挙に吹き飛ばしてしまふ、道綽によって「暴風駛雨」に比されている人間社会の現実であり、人生の現実そのものであったと言えるであろう。出家という立場にあっては、自らの立ち位置からしてもそのような現実を第三者的な立場からとらえる眼を否定できない。親鸞は、流罪を通して、衆生の一人として生きる身と成ることを通して、そのような現実から、一度の出遇いが根っこから問われることとなったのである。

別序に「末代の道俗」と指摘しているが、そこには、自ら身を置く現実が正しく「末代」、即ち依るべき真実のない時代であるとの親鸞の認識が示されている。

諸仏如来の真説

「諸仏如来の真説」とは、信巻冒頭に引かれている『大経』、及び『如来会』の本願文・本願成就文を中心とする文であるが、その文を「諸仏如来の真説」と表されているところには、親鸞の大経観（註）があると言える。親鸞は、『大経』の釈尊出世本懐を説く、

如来、無蓋の大悲を以て三界を矜哀したまう。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い恵むに真実の利を以てせんと欲してなり。

〔真宗聖教全書一・四〕

との文の「如来」について、『一念多念文意』において、

『大経』には、「如来所以、興出於世、欲拯群萌、恵以真実之利」とのたまへり。この文のころは、「如来」とまふすは諸仏をまふすなり。（中略）しかれば、諸仏のよよいでたまうゆへは、弥陀の願力をときて、（以下略）

〔定本親鸞聖人全集三和文篇・一四三頁〕

と、述べている。また、同じく『尊号真像銘文』においても、

「如来所以興出世」といふは、諸仏の世にいでたまふゆへはとまふすみのり也。「唯説弥陀本願海」とまふすは、諸仏の世にいでたまふ本懐は、ひとへに弥陀の願海一乗のみりをとかむとなり。しかれば『大経』には「如来所以興出於世欲拯群萌恵以真実之利」ときたまへり。如来所以興出於世は、如来とまふすは諸仏とまふす也。

〔定本親鸞聖人全集三和文篇・一二六頁〕

と述べている。両著ともに、『大経』で釈尊の出世本懐を説く力所の「如来」を、「諸仏」としているのである。このことは、大経の法は、無数の人々（諸仏）によって生きられ表されてきた法であり、それが釈尊によって（釈尊の名によって）経としてまとめられたものであるとの、親鸞の大経観を示しているものと了解される。このことについては、曾我量深が、『親鸞の仏教史観』において指摘しているところである。今、その一節を紹介するなら、

親鸞は『大無量寿経』を以て真実の教、如来興世の真説、一乗究竟の極説である、かう申しました。何故『大

『無量壽經』が真実の教であるかと云へば、浄土真宗を開顕して居るからである。浄土真宗の道を開顕した、浄土真宗と云ふ一つの道の歴史、道の自体の展開の歴史、其道の歴史の中にあつて道の歴史を明かにして居る。故に既に『大無量壽經』と云ふお経が先づ成立してそれから『大無量壽經』の歴史が始つたのでなうて、『大無量壽經』と云ふものは既に道の歴史の中にああ云ふ経が出来たのである。已に道の歴史と云ふものを前提として『大無量壽經』と云ふものがある。かう云ふ具合に親鸞は観てお出でになるのであります。

（『曾我量深選集』五・四二二頁）

とある。

ところで、信巻の大経の引文を拝読して注意させられるのは、正依の『大経』と傍依の『如来会』の願文と成就文の四文の末尾に説かれている「唯除の文」である。『真宗聖典』でいえば、一頁足らずの間に繰り返し四度も出てくるのである。この「唯除の文」は、善導においても法然においても、普通は省かれていた文である。親鸞は、五濁の現実に直面することを通して「唯除の文」に着目し、「唯除の文」を含むこととして願文と成就文に信順して如来の願心を改めて聞き開いていったのであろう。そして、以下に引かれている「論家・釈家の宗義」の文との呼応において、本願が、正に法蔵菩薩の本願として、即ち自らに背く衆生の現実を担い、その衆生の上に自らを表現し、表現することを以て衆生を救おうとする本願として明確に了解されることになったのである。あえて分ければ、本願文には担う願意がただかれ、成就文には表現する願心がただかれるのである。

論家・釈家の宗義

次に、「論家」の文として『論註』讃嘆門の文が引かれる。その文は、曇鸞が、

称名憶念有れども、無明なお存して所願を満てざるはいかんとならば、
（『定本親鸞聖人全集』一・一〇〇頁）

との問いを提起し、その問いを受けて、曇鸞が改めて浄土三経そして天親の『浄土論』に尋ね直して自らの問いに決着を見出していった文である。ここに提起されている問いは、一度の出遇いをえた親鸞が抱えた問いそのものであり、また、およそ本願念仏の法との出遇いを得た者が等しく抱える問いであると言える。親鸞は、自らに先立って問うた曇鸞に道を尋ねているのである。その徹底して尋ねていった姿が「披閲す」という言葉には込められている。その讃嘆門の展開内容については既に『同朋仏教』四二号において論じているので今は略すが、その中心が、
謂わく如来は是れ実相の身なり、是れ物の為の身なりと知らざるなり。
（同上）

にあることは言うまでもない。ここで、曇鸞は「為物身」という造語をもってまでして、衆生救済の如来を表現しているのである。その「為物身」なる如来が、いかなる如来であるかを明らかにすべく、さらに親鸞は、『論註』讃嘆門の文に続いて『讃阿弥陀仏偈』の文を引いている。

『讃阿弥陀仏偈』に曰わく、曇鸞和尚造なり あらゆるもの阿弥陀の徳号を聞きて信心歡喜して聞くところを慶ばんこと、乃し一念におよぶまでせん。至心の者回向したまえり。生まれんと願ずれば、皆往くことを得しむ。唯五逆と謗正法とをば除く。かるが故に我頂礼して往生を願ず、と。已上
（『定本親鸞聖人全集』一・一〇一頁）

この文は『大経』の本願成就文に相当する文であるが、注意させられることは、親鸞において「至心の者回向したまえり」と読まれていることである。そこには、「為物身」が因位法蔵菩薩であることが明確に示されている。そして、この文においても「唯除の文」があり、「唯除の文」をも含めて、その全体を受けて「かるが故に我頂礼して往生を願ず」と述べられているのである。ここにも、「唯除」をも包む形で願心を聞きとっている親鸞がいる。続いて、善導の三心釈を中心とする文である。今は詳論することを避けるが、その大意を述べるなら、『観経』の三心の教説、すなわち、

若し衆生有りて、彼の国に生まれんと願ずれば、三種の心を発して即ち往生す。何等をか三つとする。一者至誠心、二者深心、三者回向発願心なり。三心を具すれば、必ず彼の国に生ず。
〔真宗聖教全書〕一・六〇

の前に善導が歩を止め対座して、その仏意を尋ねた釈である。そして、その善導の釈意を法然が尋ね、さらにそれを受けて親鸞が釈意を尋ねたのである。そして、善導の釈意が、さらに遡れば三心の教説の仏意が親鸞によって明瞭にされたものである。そこに、浄土仏教が単なる果成の阿弥陀に依って立つ仏教から因位法蔵菩薩に依って立つ仏教、本願の仏教として明瞭に確定されることになったのである。その意味において、善導の三心釈は、遂に仏意を公開せしめた仏教史上における須要の釈と言わなければならない。

「信巻」に引かれている善導三心釈の文は、善導の三心の教説との格闘の記録としての三心釈の文を受けて、親鸞が、その文中に因位法蔵菩薩の願心を聞き取り、その法蔵の願心によって生きることを勧めている釈として引いている。それは、引文全体をなすものであるが、今、その意を示している特徴的な文を挙げておきたい。

一切衆生の身・口・意業の所修の解行、必ず真実心の中に作したまえるを須いることを明かさんと欲う。

〔定本親鸞聖人全集〕一・一〇二頁

凡そ施したまうところ趣求を為す、亦皆真実なり。

(同上)

回向発願して生ずる者は、必ず決定して真実心の中に回向したまえる願を須いて得生の想を作せ。

〔定本親鸞聖人全集〕一・一〇六頁

これらは、衆生に対して法蔵菩薩の願心によって生きることを勧めるのが、『觀經』三心の教説であることを明瞭に示している文として、親鸞によって引かれている文である。

以上を通して明らかなように、親鸞は、一度の出会いが問い返されることを通して、「諸仏如来の真説」「論家・釈家の宗義」に尋ねていくことによって、本願を、正しく法蔵菩薩の本願として、即ち、自らに背く衆生をどこまでも担い、さらに、その衆生の上に自己を表現することをもって衆生を救おうとする真実として徹底して明らかにしていったのである。もって親鸞は、この一段を、

爾れば、若しは行・若しは信、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまう所に非ざること有ること無し。因無くして他の因の有るには非ざる也。知るべし。

〔定本親鸞聖人全集〕一・一一五頁

と結ぶのである。

そして親鸞は、以上の尋ね当てた内容を踏まえて、さらに問答という形をもって、自己を衆生に表現することをもって衆生を救おうとする如来の願心の世界を徹底して尋ねていくのである。その願心を尋ねていく歩みの容易な

らなさが、別序の、

且く疑問を至して、遂に明証を出だす。

(前出)

との言葉には込められている。

ここで、一つ注意されることがある。それは、いわゆる三願転入の文冒頭の、

愚禿釈の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依って、久しく万行・諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る、善本・徳本の真門に回入して、偏えに難思往生の心を発しき。

(『定本親鸞聖人全集』一・三〇九頁)

との文である。ここに「久しく万行・諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離」れたのが「論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依って」であると記されているのである。普通に了解するならば、そのことは、二十九歳時に比叡山を下りて法然の吉水の僧伽に入室した時として了解されるところである。しかし、親鸞はそのようには記していないのである。

ここで、「論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依って」が何を意味しているのかということであるが、私は、別序の「論家・釈家の宗義」にあい応じていると了解する。別序において、「論家の宗義」とされているのが、ここでは「論主の解義」と記されているのである。また、別序において、「釈家の宗義」とされているのが、「宗師の勸化」と記されているのである。⁽¹⁾

そのように了解するならば、親鸞にとって、信巻において「論家・釈家の宗義」によって明らかにされたことは、それほどに決定的な意義を持つ事柄であったということである。勿論、親鸞は、一応は二十九歳時に法然門下に入っ

た時に「万行・諸善の仮門を出でて、双樹林下の往生を離」れたに違いない。しかし親鸞において、そのことを、決定的たらしめられたのは、その後、「論家・釈家の宗義を披闡」することによってであったのである。そこに、親鸞にとって生涯を貫くこととして揺るぎない信が明確になったと言い得るのではないか。そのことからして、信巻所引の曇鸞の文、そして善導の文は、親鸞が本願の仏教として浄土仏教を明らかにするについての、それ故に親鸞の宗教思想の土台をなしている文なのである。

以上のごとくして、親鸞は浄土仏教を本願の仏教として明確にした。そして、本願の仏教として、浄土仏教を教相として示されたのが『教行信証』である。もって、『教行信証』では、教巻を除いて、各巻には標竿の文として願名が挙げられ、本文に入っては願文および成就文が記されているのである。

願生の信

本願の仏教、それは我われに即して言うなら、本願を離れて宗教的経験世界をも含めて、人生経験の全てをとらえることを否定する仏教であり、本願を頂くことをもって全てとする仏教であることを意味している。

そのことについて、親鸞は、法の側から、

爾れば、若しは行・若しは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまう所に非ざること有ること無し。因無くして他の因の有るには非ざる也と。知るべし。

〔『定本親鸞聖人全集』一・一一五頁〕

若しは因若しは果、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまえる所に非ざること有ることなし。因淨なるが故に、果亦淨也。知る応しとなり。

〔定本親鸞聖人全集〕一・二〇一頁

と示している。

また、衆生の側から、

心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。(中略) 信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さんと。

〔定本親鸞聖人全集〕一・三八三頁

唯信はこれこの他力の信心のほか余のことならずとなり、すなわち本弘誓願なるがゆへなればなり。

〔定本親鸞聖人全集〕三和文篇・一五五頁

等と、示している。

ところでこのことは、平安浄土教以降、浄土仏教に付随してきた死後往生・臨終来迎の浄土仏教観、すなわち彼方に浄土をイメージし、実体化して、その世界への往生を説く浄土仏教観が完全に払拭され、克服されたことを意味している。さらに言えば、そのことは往生、そして浄土の意義が変革を遂げたことを意味している。現実と離れた彼方の世界へ、死後に往生するとする往生観から、本願に生きるという人間としての生き方を示す仏教への転換であり、もってそのような人生の在り方そのものを往生と言い、浄土も、願に生きる人の歩みのところに、現に超えて開かれる生活世界をあらわすものとなったのである。正に浄土仏教が、人間に生き方を示す仏教、浄土を莊嚴していくという創造的な意義を持った人生を開く仏教として確立されたことを意味しているのである。

そこに注目されるのが、信巻冒頭「大信嘆徳」の筆頭第一に「長生不死の神方」と記されていることである。それは何を意味しているのだろうか。

この信の讃嘆に応答しているのが、信巻末尾に記されている阿闍世獲信の一段の、

世尊、若し我審かに能く衆生の諸々の悪心を破壊せば、我常に阿鼻地獄に在りて、無量劫の中に諸々の衆生の為に苦惱を受けしむとも、以て苦とせず。爾の時に摩伽陀国の無量の人民、悉く阿耨多羅三藐三菩提心を発しき。是の如き等の無量の人民、大心を発せるを以ての故に、阿闍世王所有の重罪、即ち微薄なることを得しむ。王及び夫人、後宮・采女、悉く皆同じく阿耨多羅三藐三菩提心を発しき。爾の時に阿闍世王、耆婆に語りて言わまく、耆婆、我今未だ死せざるに已に天身を得たり。短命を捨てて長命を得、無常の身を捨てて常身を得たり。諸々の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を発せしむ。

（『定本親鸞聖人全集』一・一七四頁）

であると了解される。ここには、阿闍世の身に発起された本願の信による救いの内容、すなわち往生の内容が、阿闍世自身の言葉をもって表白されている。信巻には、信に即して開かれる証、そして利益が記されているが、それから全体の内容が、この阿闍世の表白としてリアルに示されていると了解されるのである。

この阿闍世の表白には、浄土の実体化に基づいた死後往生的浄土教の影は全くない。衆生の阿鼻地獄的現実に身を置いて願に生きる歩みが信の救いの内容として表白されている。さらに、その生の歩みは、多くの人々の願心との呼応の中に生まれていく歩みであることが表されている。そして、そのような内実をもつ生を、「耆婆、我今未だ死せざるに已に天身を得たり。短命を捨てて長命を得、無常の身を捨てて常身を得たり。」と、長生不死の内容

として表しているのである。そのことは、ともすれば「長生不死」というと、涅槃の境として、彼方に対象化されて了解されがちであるが、そうではないことを意味している。現実を場として、どこまでも願に生きるという生在り方、即ち浄土莊嚴の創造的な生を意味しているのである。

そのようにして、親鸞における本願の仏教としての浄土仏教の確立は、浄土仏教をして、人生に創造的な意義を開くものとして明らかにされたことを意味している。そして親鸞は、年とともに浄土仏教を願に生きる仏教として自らに徹底していったことを窺わせる。そのことを、特に第十一願成就文の親鸞の読みの変遷にいただくことができる。親鸞の年齢にしたがって、記しておきたい。

『教行信証』「証卷」・六〇歳頃

其れ衆生有りて、彼の国に生まるれば、皆悉く正定の聚に住す。所以は何ん。彼の仏国の中には諸の邪聚及び不定聚無ければなり。

〔定本親鸞聖人全集〕一―一九六頁

『浄土文類聚鈔』・八十三歳頃

其れ衆生有りて、彼の国に生ずる者は、皆悉く正定之聚に住す。所以は何んとなれば、彼の仏国の中には、諸の邪聚及び不定聚無ければなり。

〔定本親鸞聖人全集〕二漢文篇一三六頁

『浄土三経往生文類』・八十五歳頃

其れ衆生有りて、彼の国に生まれん者、皆悉く正定之聚に住せん、所以は何んとなれば、彼の仏国の中には、諸の邪聚及び不定聚無ければなり。

〔定本親鸞聖人全集〕三和文篇二四頁

『一念多念文意』八十五歳

それ衆生あて、かのくくにむまれんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。ゆへはいかんとなれば、かの仏国のうちには、もろもろの邪聚および不定聚はなければなり。

（『定本親鸞聖人全集』三和文篇二九頁）

読みの異なりのポイントは、「生彼国者」をどう読むかである。『教行信証』における「彼の国」に対する対象的な了解を可能にする読みが、年齢とともに払拭されていき、八十五歳時の『一念多念文意』では、「かのくくにむまれんとするものは」と、願に生きることとして躍動感を持った明確な読みになっていることが知られるのである。

註

(1) 『六要鈔』で存覚が「流通分」と位置づけているごとく、その称が相応しいと了解されるが、今は、一般的な呼称にしたがって「後序」と称することとする。

(2) そのことは、漢文で並べて記すと、より明瞭である。

舍余行云帰念仏
棄雜行兮歸本願

(3) ここで言われている「問答」は、直接は信巻の三二問答であるが、さらには化身土巻の二つの問答をも包むものである。「三経の光沢」と記しているのは、『大経』の本願の三信と『観経』の三心、そして『阿弥陀経』の一心を指しているものと了解される。

(4) このことは、金子大栄が『教行信証講読』において指摘していることである。春秋社刊『金子大栄著作集』第七卷三三頁参照。

(5) 鍵括弧なしで大経と記す場合は、正依・傍依を限定しないで、通じての大経を指すものとする。

(6) 親鸞は、さらに源信の『往生要集』の文を引いている。それは、以上曇鸞・善導の文に尋ねることを通して、法蔵菩薩に

依って立つ仏教として明らかにされた仏教が、五濁の世に仏道を成就せしめる仏教であることを押さえ、さらにその信の境地を示す文として引いているものと了解される。

- (7) 「論主」と記されているのを曇鸞とすることには疑問が残るところである。しかし、親鸞は天親と曇鸞を一人格として受けとめていたと言える。そのことは、『論註』を『註論』と称し、さらに『浄土論』と称していることの上に窺うことができる。また、「解義」とあるのは、曇鸞による『浄土論』解義分の讚嘆門の註文を意味し、「勸化」とあるのは、「三心積」の文を意味しているものと了解される。